



お江戸舟遊び瓦版 1075号

水彩都市江東 ころろ美しい日本の再生 安全・安心まちづくり

お江戸観光エコシティ・お江戸舟遊びの会 江東区千田 13-10

長谷川如是閑 「ある心の自叙伝 (2)」 講談社学術文庫 84. 5. 10
法学院時代

- ・ 「日本は何処に行く」という維新後の暗中模索の間に、日本は歴史の必然から近代国家へと引きずられた。実力をもって封建日本を打倒し、近代日本を打ち立てたという誇りと、時の政府者の地位を独占していた雄藩どもは、10年経つか経たぬうちに、内部闘争から分裂し、内乱まで導き、明治10年代の「自由民権」時代を持ちきたした。
- ・ 国論の中心は、極左の「自由民権」土佐派で、維新前後から進歩思想に培れた地方文化の影響で、「泰西」の近代国家の最も尖端的なフランスの系統を受けた思想的立場によったものだ。その首領の板垣の理想は今日の「国際連合」を予想した「世界国家」の建設にあった。
- ・ 板垣の「無上政法論」は、国家を単位とする、世界的体制としての唯一国家の最高法が、今日の「国際連合」の思想と同じく、全世界に対して法的拘束力を持つ、世界的組織の想定であった。
- ・ 他方の極端に立ったのは、「帝政派」と呼ばれた4藩のうちの土肥を排除して政権を独占していた薩長連合の一派だった。維新当時は、むしろ折衷派だった土佐派の公武合体論に対して、王政復古一点張りの倒幕論に終始し、土佐派よりはむしろ左にあったのだが、政権独占後は、土佐の主権在民説による人民憲法の主張に対して、主権在君説・欽定憲法を主張した。
- ・ この両派の中間にあったのは、大隈一派の改進黨で、英国流の無血革命に倣って、主権在君民説を唱え、自由放任主義、国家政策を最小限に止める、英国流の非干渉主義を唱えた。
- ・ 伊藤博文らが欧を巡った時に、オーストリアのスタインから、近代国家の国家主義的傾向について説教されて、模倣主義よりは自国の国家的伝統により、自主的の法政制度をとるべきだと言われて、国民文化を西洋流の形式に改造するのが先決だと気づき、欧化政策、いわゆる鹿鳴館時代を持ち来したのだ。
- ・ フランスは、清国に対して積極的に侵略的となり、15年にはトンキンを略し、16年には越南を保護領とし、19年には台湾に侵入するといった風で、日本もそのどさくさに紛れ琉球を沖縄県としたような火事泥を働いた癖に、東洋に対する「泰西」諸国の帝国主義的発展に脅威を感じないわけにはゆかなかった。そこでドイツ派の強権国家に先例を追うほかに行く途のないというのが当時の指導階級一般の腹であった。東京大学が帝国大学となり、ドイツ的超国家主義への「お遍路」に出で立ったのであって、23年の教育勅語はその巡礼唄であった。
- ・ 幕末から日本の軍事的指導者の地位にあったフランスが、明治3年には新興ドイツに敗れ、その武力的弱体化が暴露された結果、10年代に入った頃には、日本の軍部がドイツに乗り換えることになって、日本はそれ以来頭から脚の先までドイツ的甲冑を装うこととなったのである。
- ・ 法学院にいる間、私は弁護士を目標としないで、新聞記者を目指していた。そのころの学校の図書館は貧弱だったので、上野の国会図書館の前身に通い、マルクスやエンゲルスの本も読んだりした。私の父が吉原の老妓を第二妻として店を出していたが、立ち行かなくなり、私もいよいよ仕事を探さねばならなくなり、海軍省雇員になった。日清戦争が近づいた時のことも、学生時代の私の頭に少しも残っていない。学生まで戦争に動員された昭和時代に比べると、そのころの若い者たちの生活がいかにのんびりしていたかが判る。
- ・ その後、父に仕事ができ、法学院の2年生に編入試験を受けて入った。法学院の先生たちは、判検事、弁護士だった。私は刑法に興味を持って新聞記者になってからも犯罪研究を続けた。



筆で立つまで

- ・ 私が中学時代を終わった明治 20 年代は、**極左的民主運動**の時代が近代的国家主義の時代へと転換し始めた時だったが、法学院を出た 30 年代は、日清戦争に勝った日本が、いよいよ**帝国主義的発展の準備**を整える時代だった。世界的には資本主義時代に移っていたが、**イギリス**はボーア戦争で全盛期的帝国主義の**最後的一幕**を演じていたし、**アメリカ**は、スペインとの戦争で、前世紀的帝国主義に止めを刺すと称して、**指導的地位**に第一歩を乗り出した時だった。
- ・ 明治 30 年代に入って、**社会主義運動**が芽を吹きだし、治安警察法が 33 年にでき、片山潜、幸徳秋水らの**社会民主党**は、直ちに弾圧された。幸徳秋水は、万朝報で「排帝国主義論」と題して、資本主義の初期の段階にも達しない日本の**幼稚な国家形態**で、資本主義最高期の帝国主義の仲間入りしようとしているのは滑稽であり、軍備を拡張して帝国主義を振り廻しても、「**空威張的、飴細工の帝国主義**」と評するも、ごまめの歯ぎしりに止まっていた。
- ・ 日本人は元来、空想的であるよりは**現実的の民族**なので、東欧的アナキズムは日本の土では、そのままには育たなかった。**文学的ニヒリズム**に行くか、日本式の「町の顔役」ないし「やくざ」の新しい型となって、文士らの玄関に頑張って「パンの略取」で生計を立てるしかなかった。
- ・ 資本主義そのものさえ、日本では、封建制をもって発展してきたので、**帝国主義も封建的領土主義に近い形式**をとろうとしていた。
- ・ 私の歴史癖は少年の頃からだったが、法学院時代以後は西洋の歴史も読み、むしろ中国や日本の歴史と古典を好んで読んだ。法学院を出た**虚弱な私**は職を求めることなく泰然としていた。

「日本」時代前期

- ・ 現代社会を批判するとみられる私だが、かなり豊かだった生活から急速に貧乏生活に落ち、その**責任は父にある**としか思わず、社会にある等とは考えることはできなかった。産業革命時代の貧乏ではなく、もっと前の封建時代の貧乏と同じ性質の貧乏だったので、その時代の貧乏人のように**貧乏を楽しむ**ことさえできた。私を時代批判の態度に導いたのは、多分犯罪研究だった。
- ・ 私は自説の環境論で、老子の思想の生まれた自然条件と社会条件とが、シナ大陸の国家の中心をなすに至った**漢民族のエジプト的性格**—黄河流域に発生した多くの農耕民族の統一された形態から生まれた—を育てたものと考えて、**儒教**はその国家形態の産物であると論じた。

「日本」時代

- ・ **元もと虚弱**だった私の静養時代は 6 年に及び、29 歳、少年時代からの望み・新聞記者になることが遂げられた。新聞記者を志したのは、そのころの一流の記者；**福沢諭吉、三宅雪嶺、徳富蘇峰**のようになりたかったからで、なってみるとそうなることの**難しさを痛感**させられた。
- ・ **20 年代**の初めに創立した「日本」は、その時代の**政治的興奮**に乗じた、最も**先端的な新聞**の一つで、その新鋭の論説は、当時の新聞界を震盪する勢いだったが、30 年代にも多くの新聞を凌いだ。もともと伝統主義の、「国粹派」の新聞ではあったが、**論説に記事**に、直接間接に、その時代の勢いを煽るに務めた。俳句と短歌とにおいて、その後の斯界に支配的勢力を持続している、**正岡子規の運動の舞台**になっただけでも、その努力は報いられたと言えるのである。
- ・ 私の入社は、子規の没した翌年で、「日本」は財政的に苦しくなっていた。明治 30 年代まではどの新聞にも**漢詩欄**があった。漢詩は 10 年代に衰えたが、20 年代の国家主義時代になると、古典復興とともに息を吹き返した。
- ・ 明治 20 年前後に書いた『**近時憲法考**』は、明治後の政治の動向が、行き過ぎたり後戻りしたり、イデオロギーが先走ったりしたが、22 年に成文化された立憲制度は、維新当時から、フランス革命後の歴史の過程を、日本が遅ればせに進んでいたことを、詔勅や法制によって明らかにした。

所感：明治・大正・昭和の 3 代を最もリベラルに生きた、日本の生んだ**代表的ジャーナリスト**が描く「心の自叙伝」として知られ、国民性解明への情熱に溢れ、明治中期以降の日本の近代化に対し、警鐘を鳴らし続けた著者の史観は鋭く、現代**日本批判・文明批判**となっている。地元深川育ちには必読の書と思う。世界的に揺れ動いている現在に有効ではないだろうか。（文責 中瀬）